

武蔵野

ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を
楽しみながら学ぶ

グリーンパーク 米軍施設

戦前・戦中の軍需工場を経て、戦後は米軍に接収されて軍の施設に。都立武蔵野中央公園のある場所は、時代によっていくつもの顔を見せます。グリーンパークと呼ばれた米軍施設が緑豊かな公園へと姿を変えた変遷を市民の活動とともに追っていきます。



グリーンパーク米軍宿舎／昭和46（1971）年

武蔵野市八幡町に広がる緑の原っぱを中心とした都立武蔵野中央公園。市民の憩いの場として親しまれているこの周辺には、戦後の一時期、米軍宿舎やアメリカンスクールなど軍関係の施設があったことをご存じでしょうか。現在の穏やかな公園の姿からは想像しにくいですが、かつてここは米軍に従事する2000人以上もの人々が暮らす「小さなアメリカ」でした。安心で安全な暮らしを願う武蔵野市民の手によって緑豊かな広場がいかんにして獲得されていったのか、その歴史を振り返ってみましょう。

かつて武蔵野に 軍需工場があった

都立武蔵野中央公園のある場所は、戦後、米軍宿舎などの施設が置かれましたが、戦前・戦中には中島飛行機（現在の株式会社SUBARUの前身）武蔵製作所がありました。中島飛行機は大正6（1917）年に創業し、昭和13（1938）年、日中戦争開始による軍需拡大で武蔵野にも製作所がつけられたのです。第二次世界大戦下でも、主に軍用機のエンジンなどが作られ、軍需拡大によって

近隣に雇用を生み出す一方、日本の戦力を支える拠点であることから米軍による度重なる空襲を受け、多くの住民が犠牲になる忌まわしい記憶も刻まれました。

米軍からの爆撃を受けて破壊された武蔵製作所の東工場跡地は、戦後民間団体などに払い下げられ、電気通信研究所やグリーンパーク野球場、都営住宅などが建つことになりました。昭和26（1951）年に開場したグリーンパーク野球場は、当初「東日本一の大球場」と謳われ、後楽園球場の代替としてプロ野球の試合も開催されましたが、都心から遠い、土ぼこりがひどいなどの理由によってわずか5年ほどで取り壊され、跡地には公団住宅が建設されました。

武蔵野に米軍施設が。 市民の反対運動が過熱

昭和26（1951）年に調印された日米安保条約によって、アメリカが日本に軍用基地を置くことが許可されます。これによって、立川や府中などにあった旧日本陸軍の施設が相次いで米軍基地として利用されることになり、武蔵製作所の西工場跡地も、これらの基地から立地的に近い

こともあって米軍に接収されることになりました。

立川基地が、昭和25（1950）年に勃発した朝鮮戦争の重要な拠点となる中、西工場跡地を立川基地の軍人たちが住む宿舎に充てるという話が浮上します。「武蔵野にも米軍の施設がくる」。武蔵野の市民たちは戦々恐々とし、断固阻止すべしと行動に出ます。

昭和27（1952）年、周辺住民らは「駐留軍宿舎建設反対に関する請願および陳述」を市議会に提出し、市民の平穏な暮らしを脅かす流れに對抗しようとする立ち上がりしました。

同年、この請願は採択され、市議会特別委員会を設置し、時の市長、荒井源吉とともに反対運動を開始することになります。この反対運動は、PTAや教職員組合、知識人の有志などによって草の根で始まりました。市民が自ら声を上げ、立ち上がるのは、今も昔も変わらない武蔵野人気質といえるかもしれません。

荒井市長は、この市民組織をベースに「米軍宿舎反対期成同盟」を結成し、反対運動の先頭に立ちます。運動は大きな盛り上がりを見せますが、結果として米軍宿舎建設が回避



市制施行30周年記念植樹祭で武蔵野中央公園にて植樹する後藤市長と美濃部都知事／昭和52（1977）年



グリーンパーク払い下げ市民大会の様子／昭和46（1971）年

されることはありませんでした。

しかし、米軍側から、当初の予定だった独身将兵用の宿舎ではなく、婦人将校や家族持ちの将校に限定した宿舎にする、立川基地などへの移動は専用バスを利用させる、という案が示されます。これは周辺地域の治安の悪化や風紀の乱れを懸念する市民側に対する、一種の妥協案でした。

武蔵野の小さなアメリカ、 米軍宿舎グリーンパークの誕生

こうして昭和28（1953）年、通称グリーンパークと呼ばれた米軍宿舎をはじめ、米軍消防署、アメリカンスクールが誕生します。昭和30（1955）年に入り、立川基地を中心に、横田、府中基地に勤める将校とその家族が続々と宿舎への入舎を開始。650世帯、約2300人が暮らす「小さなアメリカ」になっていきます。内部には映画館や理髪店、レストランなどもあり、宿舎内では生活が完結するほど充実していたといえます。

宿舎建設に反対した市民たちも、アメリカ人自体を忌み嫌っていたわけではありませんでした。昭和31（1956）年からは、毎年夏になる

と宿舎のゲート内が開放され、「日米合同盆踊り大会」が開催されるようになります。

また、グリーンパーク内でメイドや店員として働く日本人女性も多く、市民が軍事施設の誕生を脅威と捉える一方で、人と人との交流が育まれていきました。

米軍3施設が返還。 市民が憩える緑の公園へ

グリーンパーク誕生から10年ほどが過ぎ、他の米軍施設が相次いで郊外へ移転し始めると、武蔵野市の市民たちも再び声を上げ始めます。昭和41（1966）年には、緑町団地や都営住宅、商店街からなる緑町懇話会が「米軍3施設移転に関する請願」を市議会に提出。これは、「米軍施設を他の地域に移転させ、その場所に住民のための施設をつくってほしい」というもの。住宅地として発展する武蔵野市の真ん中に置かれた米軍宿舎や施設が、まちの発展を妨げている、という主張でした。

そして昭和46（1971）年、外務省で開かれた日米合同委員会で、武蔵野市の米軍3施設を米軍から日本に全面返還することが決定。米軍宿

舎、米軍消防署、アメリカンスクールは横田基地へ移転されることになりました。この跡地をどう利用すべきか、国、都、市、民間団体などによってさまざまな思惑が交錯しましたが、市民は「緑を中心にした施設にしてほしい」と訴え、最終的に昭和50（1975）年、美濃部都知事が「都立武蔵野中央公園都市計画」を発表します。

昭和52（1977）年、米軍宿舎は解体となり、跡地は一時的に市民に開放され、広大な「原っぱ」として親しまれました。「今後、都の公園になっても、子どもたちが元気に遊び回る広々とした原っぱの姿を残したい」。市民団体から原っぱ存続の要望書が都や市に提出され、都の公園基本計画も、こうした市民の思いを反映したものとなりました。

平成元（1989）年、念願の都立武蔵野中央公園が開園します。緑の原っぱが広がる公園が誕生した背景には、軍需工場や米軍施設という歴史を乗り越えて、声を上げ続けた市民の力がありました。そして、米軍施設を受け入れた他の地域があつてこそ、今日の平穏な光景が成り立っていることも忘れてはなりません。